

ISLF2018ワークショップへの 参加・学び・その後の取り組み

梶木 尚美（大阪教育大学附属高等学校池田校舎司書教諭）

全3回のワークショップでは、いろいろな刺激を受けた。一参加者として、第3回の会場校として、そして高校生と一緒に学んだ司書教諭として、このような機会をいただいたことに深く感謝する。

フォーラムの会場校のお話をいただいたのが3月。うちのような弱小図書館でいいのでしょうか…というような疑問と不安もありながら、できるだけなんでも取り組みましょうという姿勢のもと、第3回(9月)の会場を引き受けた。第1回の会場である横浜インターナショナルスクールは国際バカロレア(IB)認定校。第2回の関西学院中等部は図書館が充実している私立校。IB教育が図書館を探究的な学びの中心として位置付けていることも知っていたので、「なぜ、附高池田の図書室で？」と聞いてしまった。附高池田の図書館員は兼任司書教諭と非常勤司書(週3日)の二名である。施設も予算も十分ではなく、ある意味日本の学校図書館の厳しい状況を認識できる好事例だともいえる。私はそのような状況の中で、附属小学校や附属中学校の先生たちと一緒に学校図書館に関する研究に取り組み、高校における探究的な学びのあり方を実践的に“探究”している兼任司書教諭である。理想やモデルとはほど遠い図書室の状況であるとの自覚はあるので、参加者の皆様をどのようにお迎えしたらいいものかと考えた。恵まれない状況下でもこのくらいは頑張れるのだと主張してもいいのかもしれない、他の参加者の方々から意見をいただいてそれをうちの管理職に持っていく作戦はどうだ…などと思いを巡らせながら、準備を始めた次第である。そうこうしているうちに5月になり、第1回フォーラムが近づいたころ、高校生と一緒に参加しないかという話をいただいた。思いがけない、しかも急なお話であったが、図書館好きの生徒の顔がすぐに浮かんだので声をかけ、一緒に新幹線で横浜へ向かった。第2回は兵庫県、第3回は自校開催であったので、図書委員や文芸部員に声をかけ、毎回高校生たちと一緒に参加することができた。各ワークショップの講師はIB校の司書教諭や司書である。IBは探究を基盤とした教育をプログラムの中心においており、認定校としての要件には図書館や実験室の整備がある。そういった教育環境における、しかも日本以外のIB校での実践はとても興味があった。そして、実際に大変刺激的であった。

参加した高校生3人は、他校の図書室でのワークショップに参加した直後に「面白かったです!」、「この図書室いいですね。お金かけてますね。それに比べてうちの図書室は、全然…」と毎回言っていた。私とその都度「うちも、狭いわりには頑張ってると思うんやけど。」と主張しても、「エ～!全然ですよ。何とかならないんですか!」と、私が怒られているような状況であった。第3回のころには、「うちの図書室の広さであれば、それなりに本がある方だと思う。この部屋だと、これ以上工夫のやりようがないかも。」と呟いてくれるようになり、我々図書館員の苦労を若干分かち合えるようになった。今では私が「図書室を変えていきたいよね。もっと、大きな声で言って!生徒の声こそが推進力になるはず。」と話しかけている。参加者として一緒に学び、同じ経験を共有したことにより、附高池田の図書館を一緒に改善していこうよ、という会話ができるようになったのだと思う。この原稿を書きながら(2019年1月)、改めて3人に感想を聞いてみた。「インターナショナルスクールの図書室を見学できてよかった。楽しかった!」「学校の図書室は、本があって、本を読むと

ころだと思いついていたけれど、いろいろな学びの中心になるところなのだとわかった。」
「図書室でイベントをしたり、面白い椅子があったりして、ちょっとびっくり。」「図書委員会の活動が活発になるきっかけになった。」など、数か月経った今でも、各回のワークショップについて彼らはよく覚えている。とても興味深く、印象的であったようだ。もちろん、母語ではない英語を使い、しかも図書館のプロの方々に混ぜていただいたことは、彼らの成長を促す貴重な体験であった。

附高池田図書委員会は、11月に、同じキャンパスにある附属池田小学校図書室でイベントをした。小学校司書教諭の全面的な協力があり、放課後、高校生が小学生に絵本を読んだり、しおりやクリスマス飾りの作り方を教えたりして、一緒に楽しい時間を過ごすことができた。もちろん中心になったのは、ワークショップに参加した高校生たちである。低学年を中心に30~40人の小学生たちが楽しそうに取り組む姿を見て、高校生の嬉しい悲鳴が聞こえてきそうであった。写真1は、その際に作ったツリーであり、今も小学校の図書室を飾っている。

学校図書館は一人職場や二人職場になりやすい。他の教職員が学校図書館に関心を持つにはどうしたらいいのかを常に考えて、私なりに思いつくことを一通りやってきたつもりであった。しかし今回、高校生が大切なパートナーになり得る人材であったことに改めて気づいた。先生と生徒ではなく、ワークショップの参加者として同じ立場で学んだことが、発想を変えるきっかけになったのだと思う。私が研究会で他校の司書教諭と一緒に勉強し、議論するように、生徒たちと一緒に勉強して附高池田の図書館について考えていけば、何かが変わる予感がする。通常は大学生以上が対象になる研究会やワークショップが、高校生にも門戸を開いてくれはしないかと、チャンスをうかがっている。

フォーラムの会場になったことも、附高池田にとっていい経験になった。非常勤司書や他の教員がワークショップに参加して刺激を受け、学校図書館についての新しいイメージを持つようになった。高校生たちが、たどたどしいながらも英語で頑張っている姿も印象的であったようだ。講師の Zhao 先生は、「図書室はここだけなのか？これでは足りないだろう。」
「どうしてフリーWi-Fiではないのか？」と戸惑われていたが、私はその会話を紹介して、世界水準の学校図書館はこうあるべきと校内で主張している。

2月には小学校で3回目のイベントを実施する。写真2はイベント用に準備した Book in a Bottle である。関西学院中等部での第2回ワークショップに参加された方は、講師の Tam 先生に見せていただいたボトルを覚えておられると思う。これをやってみようということで、小学校司書教諭の指導のもと小学生用の本を選び、イベントの準備を始めた。

イノベーティブという言葉が、学校教育でもキーワードになりつつある。ICT等の導入により学習環境が変化し、society5.0に対応する教育…イノベーティブな人材を育成することが…云々である。私たちもまた然り。学び、知識を関連づけ、協働して新しい局面を拓く意志を持ち続けたい。私は11月の日韓交流行事で、Kahoot! を使った歴史の授業を実施した。Kahoot! は、第3回ワークショップで体験したアプリのひとつだ。面白いと思ったらやってみなくては！である。

学校図書館の多様なあり方や先進的な取り組みを学びたいという思いは、多くの学校図書館関係者が持っている。今回、現場で実践中の講師によるワークショップで体験的に学ぶことができた。これからも、ぜひこのような機会を設けていただきたい。そして、できれば生徒たちと一緒に参加したいと思う。



写真1 クリスマス飾り



写真2 Book in a Bottle